愛媛県市長会長賞　壁新聞部門
「川に名を残した男　足立重信」
松山市立三津浜中学校　第１学年　佐々木　優真

川に名を残した男　足立重信

松山市立三津浜中学校 1年 佐々木 優真

動機

僕の祖父は、橋や道路、ダム、河川改修や治山工事など、若い頃様々な工事をしてきた。そして、重信川の護岸工事や橋の工事もしたことを聞いて、足立重信のことが頭に浮かびとても親近感がわいた。そこで、重信についてもっとくわしく知りたくなり課題にした。

足立重信 プロフィール

足立重信は、加藤嘉明の家臣で伊予川（重信川）の改修工事や湯山川（石手川）のつけかえ工事、そして、松山城と城下町の建設に力を尽くした。25年間も工事と指揮したが、城の完成を目前にして亡くなった。本名（目上に対して使う名前）は重信。字名（目下に対して使う名前）は兼清・元清。通称（多くの人が呼ぶ名前）は平右衛門。

足立重信の生涯（生誕不詳～1625年）

- 生誕年は不明 ・美濃の国（岐阜県）に生まれる。
- 13～15才 ・加藤嘉明の小姓（身の回りの世話役）となる。
- 1595年 ・文禄の役（1592年）の功績により加藤嘉明が伊予の国正木（松前）6万石の城主となり、足立重信も伊予の国へ入る。
- 1596年 ・松前城の拡張工事開始 ・伊予川改修工事開始 ・かえ川工事（農地に水路を作ることにより5000町歩の水田を作り出す。
- 1600年 ・関ヶ原の合戦で加藤嘉明が東軍家康に味方する。 ・三成対家康の戦いの戦功により5000石所領の家老になる。
- 1601年 ・勝山に築城する許可がおりる ・湯山川（石手川）の改修工事開始
- 1602年 ・勝山城の建設工事開始
- 1603年 ・加藤嘉明と松山に移り住み、新城下を「松山」と名付ける。
- 1607年 ・湯山川（石手川）の改修工事完了
- 1613年 ・温泉郡三神島の山林伐採を定める
- 1615年 ・新居郡内の人口調査を定める ・風早郡宮内村の年貢率を定める
- 1625年 ・新居郡・大生院村大庄の年貢率を定める ・病気（過労）が原因でしぬなる。
- 1627年 ・松山城が完成する。

加藤嘉明の人物像

安土桃山時代から江戸時代にかけての武将、大名。豊臣秀吉の子飼衆で、賤ヶ岳の七本槍・七将の1人。伊予松山藩主および会津藩初代藩主。河川改修による治水工事、築城や城下町の建設などにも力を発揮した。松山城築城の評価は高く、嘉明の騎馬に乗った銅像は有明である。嘉明は、よしあき・よしあきらと文献によって異なっている。

（加藤嘉明銅像前にて）

湯山川のつけ替え工事（1601～1607年）

（湯山川つけかえまでの流れ）

・正木城（松前城）は、豊臣秀吉から伊予の国正木（松前）6万石城主を命じられた加藤嘉明によって建てられた。

・正木城は、手狭で、近くを流れる伊予川（重信川）も度々洪水を起こして人々を困らせていた。

↓

〈嘉明は、重信に相談〉
（「正木の城より立派な城がほしい」
「山に城がそびえ、城下町をめぐり、城下町も整えたい」）

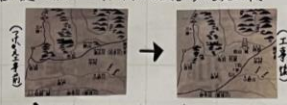
・松山平野の中心をなす勝山に、築城することとなる。しかし、近くを流れる湯山川（石手川）が度々洪水を起こしていた。

↓

そこで、重信に湯山川のつけかえ工事を命じる

〈難工事だった湯山川のつけかえ工事〉

①石手寺の東（北せき）にある数十メートルにわたる大きな岩を手で切りくずし、流れを南西に変え、余戸の地で、伊予川（重信川）に合流させた。



〈苦労したこと①〉大きな岩を手で切りくずすこと（工事は思ったようにはかどらない）
「岩を一升（1L）切り崩した者には米を一升あたえる」と伝える
（その米は一俵（60kg）で現代の10万円くらいの価値というから当時はかなりの値打ち）

↓

人々は大いに仕事に働き成功した。

②水路をつくる工事にとりかかる

〈苦労したこと②〉上流の狭い谷から一気に水が流れて出てくるためうまく堤防を築くことができない。
（川の水の勢いを弱める方法）

↓

「かすなげ」という工法を工事にとり入れて堤防の強化に取り組み完成させた。

（現在の手伝い）

その後、工事は進み、岩せきから湯山川が伊予川と合流するところまで長い土手が完成した。

（さらに大きな土手にするため、ゲヤ水を組入れ）

今も、当時の水々が残っている。

勝山城（松山城）を造る（1602～1627年）

《立派な城を造るため》

・城攻めの経験豊富な加藤嘉明は、実践に備え難攻不落の城を建てるよう足立重信に命じた。

・松山城は、小高い山の頂に本丸、南西の麓に二之丸、三之丸を置き、水堀と土塁で周りを囲んだ。山全体を生かした広大な縄張りは、幾重にも石垣を連ね守りを固めた。

「亀甲状城郭」は松山城の別名。松山城を甲羅に、城主の名前を亀、伊予神社を鳥に見立てたと言われ、見る人の心を引いた。松山藩の特徴の大絵図

《城造りで待っていた大問題》

・石垣を築くこと➡標高132mの勝山の山頂に80万個もの大きな石を運び上げる。
（1つの石を運び上げるのに2日以上かかった）

（正木城や湯築城（道後）の石の再利用。
松前の港に大名から石垣用の石や砂が送られた。）

↓

「おたたさん」（桶を頭上にのせて、魚を行商する女性）が、魚の代わりに石や砂を頭にのせ、松前から勝山まで（片道約1km）運んだ。

石垣は何千人もの民衆の協力で運ばれた。

（資料の石碑から）

《一夜にして運ばせた瓦》

・城の瓦は近郷の農民を動員して城の三方から一夜にして山頂に運ばせ、嘉明を大変驚かせたという。重信の知恵もさることながら、城主嘉明を支えようという民衆の協力がとても強かったことが分かる。

松山城の完成と重信のさいご

・松山城の完成が間近に迫った頃、重信は病気で死の床に就いていた。重信は、死の直前、「自分のなきがらを城の見えるところに埋めてほしい」と頼んでいた。嘉明は、その願いを叶え、来迎寺に手厚く葬った。重信の墓からは、松山城や、松山の町並が見渡せる。そして、重信の功績を称え、伊予川は後に「重信川」となった。

（足立重信の墓、来迎寺にて）

加藤嘉明の座右の銘

「真の勇士とは責任感が強く律儀な人間である」
（本当に強い人とは、責任感が強く、誠実な人間関係を大切にする人である）

「武士とは常に自分を至らぬものと思え」
（決して自分に満足せず、努力を続けなければならない）

（2つの座右の銘からも、嘉明が誠実で努力を怠らず、民衆を大切に思っていたことが分かる。）

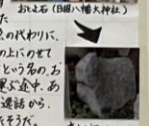
参考文献

「ふるさと松山学」松山人文化財協会
「愛媛歴史物語」
「ふるさと松山めぐり」
「名城を歩く伊予松山城」
「加藤嘉明と松山城」
松山市ホームページ city.matsuyama.ehime.jp

おとよ石の伝説

おとよ石（日尾八幡大神社）

松山市保免にある日尾八幡神社の境内に、「おとよ石」がまつられている。重さは約300キロ。松前から勝山に城を移す際、魚の行商をしていた女性たちが「おたたさん」と呼ばれる女性が、魚の代わりに、砂や石を桶に入れて頭の上にのせて運んでいた。ある日、おとよという名の、おたたさんが、勝山まで石を運ぶ途中、あまりの重さに落としたという逸話から、「おとよ石」と名付けられたそうだ。これによって、おたたさんは、無駄な重さを売り歩く特権を剥奪されたのだった。



（真ん中辺りに一つ丸く穴の開いた石が入っているおとよ石。）

正岡子規の俳句より

（若鮎の石碑の前にて）

若鮎の二手になりて上りけり
（若鮎の群れが重信川石手川の二手に分かれて上っていった）

松山や秋より高き天主閣
（松山城の天守が秋の空より壮大だ）

（南堀端にて）

豆知識コーナー

〈2020ランキング〉日本の城の人気ランキング
1位 姫路城 2位 松本城 3位 松山城 4位 熊本城 5位 二条城

〈松山の高所の理由〉
天下を治めた秀吉が家臣の蜂ヶ谷嘉明の「松」をもらい「勝山」を「松山」と改めた。

〈松山城の別名〉
金亀城・勝山城・伊予城・内藤・金色の亀が日暮れたことから。

まとめ

足立重信は、伊予の国に入ってからもしぬなるまで、30年もの間、河川改修による治水工事、築城や城下町の建設に力を尽くした。城主の加藤嘉明も、松前在城時、松山在城時等の間、長きにわたって松山発展のために力を発揮した。この2人の存在がなければ、今の松前、松山はなかったと言っても過言ではないだろう。そして、特にすばらしいと感じたことは、重信の「先頭に立って工事の指揮をとる誠実な姿勢」だ。民衆の協力が得られたのも民衆への感謝の気持ちと信頼関係が強かったのだ。そして、その重信にすべての工事を委ねた嘉明もすごい眼力があったと思う。正に馬子から大名まで愛りつのある真の勇士だと思った。

最後に、この2人の最大の共通点は、共に松山が大好きだということだ。足立重信のお墓に行ってみて驚いたことは松山城と城下町、松山がきれいに見渡せる眺望だ。そこには、嘉明の重信に対する感謝の念が込められていた。そして、この2人の松山愛を強く感じられた。僕は、この2人に感謝の気持ちでいっぱいになった。